



レッドアローズ

森野樹

Illustration
ヤスダスズヒト

KODANSHA
BOX
POWERS
BOX

起 承 轉

129

75

7

米 結

285

169

短



1

キャッチャーミットにズバンで三振、ぐわーっと
歓声これ最高。

「ストライク、バッターアウト！」

球審の声もあんな聞こえないワワーワワー。

あいつもあいつもあいつもあいつも大空最高大空
最高わっしょいわっしょいわっしょいわっしょい！

振り向いてスコアボードをチラ見た。

154km/h

やばい。今日もきてる。

キャッチャー阿藤さんからの返球を受け、うまっ
てる塁を確認。

まだ七回裏1アウト満塁が、2アウト満塁になっ
ただけ。

でも点が入る気がしない。

それは言いすぎかな？

いやいや言いすぎじゃないよ大空さん！ ってく
らい、オレバリバリ。

相手はレッドアローズの下位打線だし。

ランナーはオレが出したんじゃないし。

3対2でリードしてるけど1アウト満塁っていう
ピンチに、この大事な場面にリリーフしちゃうオレ
信頼されすぎ。しかもスター集団シャイニングスの
エース澤村さんからオレに交代だって。やばいね。
右打席のバッターがオレをじろり。赤いヘルメッ
トに白いユニフォーム。ハデなのか地味なのかって
いう。

オレは右手でグラブに一度ボールをたたきつけ、
サインを見る。

阿藤さんはストレート要求で、ミットは内角低め。

二、三塁ランナーをちらりと確認して、セットポ
ジションから足を上げる。

ふみ出したスパイク裏はがっちり地面をつかまえた。下半身からこみ上げてくる力を、腕を通じて指先にこめる。

投じたボールに、バッターは動かない。

「ストライク！」

球審の右手が勢いよく上がった。

ハイハイ。

キャッチャーからの返球を受けてから振り返り、帽子をなおすフリをして、またバックスクリーンをチラ見。

152km/h

振り返って、オレは阿藤さんのサインを見る。

初球と同じ場所へ落ちていくフォーク。

オレはうなずき、またランナーをちらちら見てから左足をふみだす。

うんざりするくらい練習した、ストレートと同じ腕の振りのリリースだ。

ボールが指から離れる瞬間、人さし指に軽い引つ

かかりを感じたのはいつもどおり。

内角の、高さは真ん中ぐらい。かと思いきや、やや右バッターへ近づきながら落ちるシンカーぎみのフォークに、バットはかすりもしなかった。

「ストライク！」

返球を受け、オレはまたさりげなくバックスクリーンを見る。

141km/h

出た！ 140キロフォーク。

今日いいね。今日はいいいよ。いやいや今日『も』いいよ。

そしてスタンドでひときわかがやく村瀬アナは絶対オレだけを見てる。

あなたのために三振ゲット、ついでに心もゲットだぜ！

やってやるぜと阿藤さんを見ると、サインは内角高め、ストライクゾーンへストレート。

三球勝負、いいっすね。

三球目、バッターはなにを待ってたのか、バットをびくりとも動かさずに突っ立つてるから、ストライクアウトでございます。

「ナイスピッチ」

「サンキューっす」

チームメイトに笑顔で頭を下げながら、オレはベンチに入った。

「大空」

監督が言う。「次の回もいけるか」

「もちろんっす」

オレが言うと、監督は満足そうにうなずいた。

オレはベンチのはしっこに座りタオルで顔をこしごし。

前の回、澤村さんで攻撃が終わったから、八回の攻撃は一番からだ。ピッチャーに打席はまわらない。というか最初からオレは、八回も投げるつもりだったけどね。

いやあ、信頼されるピッチャーはつらいなあ。

「今日もいいな」

阿藤さんが近づいてきた。

「村瀬アナにかっこいいところ見せるっす」

オレが親指を立てる。「スタンドにいたんすよ」

「村瀬？」

「ビバテレビのアナウンサーじゃないっすか」

オレが言うと、年は三十前でも心はおっさんの阿藤さんは、ああ、はいはい、と反応がにぶい。

「で？」

「かがやいてるオレを生で見たから、もう熱愛発覚スクープ目前、みたいな」

「うん、ま、その調子でたのむぞ。ん？ ああそう

だ、熱愛発覚で思い出した。村瀬って、たしか……」

阿藤さんがなにか言いかけるが無意味。全然知らないはずだもんね。おっさんはおっさんらしくゴルフのことでも考えとけつての。ゴルフをバカにして

るのか！ めっそうもない！

ちらつとベンチの逆のはしっこを見ると、今日の先発、澤村さんがじっとグラウンドを見てた。

3対2でシャイニングスがリードしてるけど、澤村さん的にはめっちゃくちや不満なんだろうね、きつと。

オレが言うのもなんだけど、今日の澤村さんはここまで2失点ですんだのが不思議なくらい不調だった。ストレートは140キロいかないへろへろで、変化球もばらついてたけど、なんとか得意のカーブでごまかしごまかし。低めに集めてせめて長打はナッシング、というピッチングだ。澤村マックスから考えたらそうだなあ、30〜40パーセントくらい？ それでも、いくら相手が弱小中の弱小、レッドアローズ打線とはいっても2失点ですんではエースの貫禄だ。マジすごい。オレも早く澤村さんみたいなピッチャーになりたいっす。

でも百十球越えて、あきらかに限界だった。

1点リードで、1アウト満塁のピンチ！

そして、そのエースの限界に出てきたオレ。

超大事な場面が出てきちゃったオレ。

しかもずばつと連続三振、無失点。

よつ、中継ぎエース！ っって聞こえたもん。どっから。

去年までなら、オレじゃなくて山田か園田さんが出てくる場面だ。いや、もつと言うなら七回山田、八回園田さん、九回神田さんという、シャイニングス勝利の方程式である『三田』が順に投入される場面だ。

だけど今年、山田と神田さんはオープン戦のケガで出遅れ。そのせいで園田さんはしばらく九回の抑えをやることになって、だから、七回、八回のピッチャーはこいつ！ っっていう人がいないのだ。

うーん困った。

(シャイニングス幹部) 山田神田がケガか。誰か他に投げれるピッチャーいねえのか！ (オレ) はい

はい、はいはいはいやりますやりたいです。

(シャイ幹部) じゃあ大空、試なしにやってみろ。

(オレ) わーい。

そんなふうにはチャンスもらえたら楽だね。

実際は、たまたま大空に投げさせてみたら意外とぴしゃり！ あれ、じゃあもう一回だけ。ぴしゃり！ あれ？ もう一回？ とかなんとかかんとかなんだかんだでもう十二試合目さ。うはは。

他人のケガを喜んじやいけないけど、山田と神田さんがケガしてなかったら、いまごろはまちがいなく二軍だ。やべーやべー超やべー、ってあせってたはずだ。だってシャイニングス、ムダにすげー選手多いから。

しかし。今年のチャンスも、去年までのオレだったらすぐ二軍落ちだっただろうね。でもナイスタイピングその2！ その1は山田、神田さんのケガです。

ナイスタイピングその2はフォークだ。

去年からかなりのマジモードで二軍コーチと取り組んでたフォークが、開幕して何週間かたってついに完成したのだよ。ちょうど一軍からお呼びがかかったびったりぎりぎりのタイピングで、よっしゃ完かん璧へき！ ってなったのさ。

フォークがなかったら、言いたくないけどすぐ二軍だったな。正直、100パー。あのころのボクはまだ、そう、牙きはのないケモノでした。

一軍での初フォークはびくびく。

二戦目はどきどき。

三戦目はもしや、で四戦目はこれいけるじゃん！ てな感じでここまで十一試合と一イニング、なんだかんだでオレはまだ無失点続行中。

まだ五月初めだけど、信・頼・感。

だって、さっきの監督の言葉を思い出してごらんよ。

大空は八回を投げるのがあたりまえ。

大空は無失点で切り抜けるのがあたりまえ。

そういう感じだったでしょ？ でしょでしょ？

『大空。来年ダメなら、まだ四年目だってクビもあるぞ。気合入れろ』 by二軍の投手コーチ

耳を閉じればいつでも聞こえるくらい、オレのハートに突きささって抜けない。

思えば、やばいやばいとストレスな日々だったよ。ストレスで夜も眠れない日だって月に何回かあった。食事ものを通らない日も過去に一回くらいあったと思う。円形脱毛症えんけいだつもうしようになっちゃうんじゃないか、と心配した日だってたくさんあった。

でもどうだ。きてる。流れがきてる。

「オレ中心のシーズンがいま、始まる……」

「バカが口から出てるぞ」

阿藤さんが立ちあがる。「お前は、軽く調子のつたほうがいいかもしれないが」

「そうっすよ」

「あんまり調子にのつてると、つままないミスするぞ」

阿藤さんは言つてベンチを出て行きそのままネクストバッターズサークルへ歩いていった。

この仕事、ほんとタイミングだ。

一発でクビになる可能性もある。

でも、たった一カ月でオレがシャイニングス一軍の一部になることだってある。

もし、山田、神田さんのどちらかが調整中に、オレが大きな信頼を得たらDOなる？ 『三田』交代だつてありえる。

もしくは、二人の役割を変えず、オレが先発に？

おお。

おおおお。

おおおおおお。

シャイニングスの先発ローテーションなんて入たら、人生勝ち組もいいとこだ。

そしたら、愛ちゃんもオレのことを。うへへうへへ。

いや、愛ちゃんじゃない。村瀬アナです。そう、

ちゃんづけでなれなれしく呼ぶようなナンパ男じゃないのだオレは。

「村瀬さん、今度の試合で完封かんふうしたら、オレとつき合ってくれませんか」「いやです」「な、なんで」

「だって、完封できなくても、私、大空さんの彼女になりたいんだもん」「む、村瀬さん。抱きっ」

「おい」

ゴン、と頭に衝撃しょうげきが。

振り返ると、バットを持つ園田さんがいた。

「そろそろ肩つくってくるから、お前、わけわかんねえこと言ってるねえで、八回ちゃんと抑えろよ」

「は、はい」

「それと、村瀬さんで、愛ちゃんだろ？」

こいつも愛ちゃんか。ダメだな。女心がわかってない。

いいか、女っていうのはなれなれしいのが嫌いなんだ。なれなれしくするのはつき合ってからで、つき合ってからではむしろ、なれなれしくしてほしいん

だよ。でも、お前、とか呼ぶのはちがうんだぜ？
ビギナーには難しいかな？

「村瀬愛さんっす」

「愛ちゃんてよお、たしかもうすぐ」

と言いかけたときだ。

わっ、と歓声上がる。

グラウンドに目を向けると、どの選手も空中の一点を追っていて、急いで追いつこうと視線を追った先は、スタンドだった。

一塁をゆっくり走り抜けた阿藤さんが、軽く拳こぶしをにぎる。

レッドアローズのピッチャーが全身でがっくり。

あの先発、シャイニングス打線を七回まで3点に抑えてたのになあ。ちよっと同情。

やっぱりいい選手が少ないチームはダメだな。すぐ一軍にあがれるけど、勝てないもん。一人でがんばるのも限界あるよね。

頼れるキャッチャー阿藤さん。さすが。

「ナイスホームラン！」

オレはベンチから乗り出して手をたたいた。

「2点差になったな」

園田さんは言った。「じゃ、ブルペン行ってくる

わ」

「あ、ういっす」

なんか言われてた気がするけど、なんだっけ。

オレは思い出せずに、園田さんを見送った。

八回のマウンドも大空参上！

ぐるっとスタンドを見わたす。休日ともなれば、

野球人気低迷ていめいなんてウソのようにぎっしりと席がう

まっている。良いことじゃのう。ほっほっほ。

そして彼女をチェック。

「愛ちゃん」

さすがに手は振らないが、目でアピール。今日は

あなたのために抑えます。

すると、紙コップを二つ持った男が愛ちゃんの、

いや村瀬アナのとなりに座った。反対のとなりは女性が座ってるから、貴様は今日、村瀬アナのとなりに座って野球を観るみことのできる唯一の男だ。お前の一生で二度とない最高の幸運だから、この思い出を抱えて残りの人生生きていくがいいさ！ オレの未来の嫁よめに変なことすんなよ！

と見てたら男は、持つてるコップのひとつを村瀬アナに手わたした。なんてことを。

村瀬アナは笑顔で受け取る。うむ。困ったファンに対して笑顔で対応できるのは良いことであるぞ。だがのう、コップを返さないと、となりの変態が調子にのってしまふのじゃよ。すぐ返しなさい。

変態は変態だけに、オレの愛ちゃんに対価を求められるかもしれない。サインしてよ、くらいならいい。でも変態野郎だからいきなり携帯出して赤外線いい？ とか言い出しかねない。手をさわったり肩を抱いたり、腰こしを抱きよせたりするつと手をあんなところやこんなところへ、非常にうらやま……、

人として最低なことをプレイボールしてしまうかもしれない。

ここはしつかりと、私には大空昇太郎しょうたろうさんという未来の夫があそこにいますので、と言えないと、オレの嫁になる資格がなくなっちゃうよ？

でも優しい愛ちゃんは言えないかな。どうしよう。嫁を守るためにスタンドに行こうか。ここでボールを投げるか。行くか？ そうだな。園田さんに早めに出てきてもらって、抑えてもらえばいいや。

「おい、大空」

阿藤さんが目の前に立ってた。

「うわ、いつの間に」

「なに言ってるんだ。何度サイン出してもほけーつ、と突っ立ってるから来たんだよ」

「あ、すいません」

頭を下げた。「マジすか」

「マジだよ。お前なに見てたんだ」

阿藤さんもスタンドを見る。

「愛、村瀬アナがあそこにいるんすよ」

となりの男と、試合そっちのけで話をしている。

いつものように笑顔を忘れないのはいいことだけど、いかんよ愛ちゃんアナ。変態がいよいよ行動開始しちゃうよ。

「あん？」

阿藤さんは、ビールのやつ背負ってる人の近くにほら、と説明してやってやっつと発見できた。やつぱおっさんだな。

「でしょ」

「ああ、かもな。お前よく見えるな」

「村瀬アナに関しては、オレ、視力12・0になりますよ。もうバリバリがビリビリっすからオレ、いつもよりすげーっすよ」

全員三振上等っす、と続けようとしたら、阿藤さんが言う。

「じゃああのとなりのやつは、彼氏だな。ミュージシャンの。なんていったかな」

阿藤さんが首をひねった。「あれ、結婚したんだっただかな」

「愛ちゃんは結婚してません！」

「じゃ彼氏か」

「彼氏って、愛ちゃんは誰ともつき合っていないって」

「この前写真週刊誌にでっかくのってただろ。お泊まりデート！ ビッグカップルがどうたらこうたらって」

「知りませんよ。オレ、週刊はジャンプとかマガジンとかサンデーとかしか読まないっすから」

やっぱおっさんだな。

「ふうん。なんだ、大したファンじゃないんだな」

すっかりやれよ、と阿藤さんはオレの尻をたたいて、ホームへ走っていった。

愛ちゃんのとりの男を見る。言われてみればただの変態じゃない。見覚えがある。ギターを持って、二人組の、あれだ。名前は忘れた。

愛ちゃんはオレを見ずに、その男と話をしている。いやいやいやしている。いや、いやいやいやではない。うん、ちがうちがう。話をして、愛ちゃんが男のひざに手を置いて笑ったりしてるだけだ。うんちがう。ちよつといきすぎた歓談だ。

はっ。

阿藤さんを見ると、ストレッチのサインをこれでもか！ と強く出してる。やべ。

オレはうなずいてるんだか謝ってるんだかわからないくらい頭を下げて、すぐ振りかぶった。

外角低めのストレッチだオラ！

バッターは振らず、球審の手がすばつとあがる！

「ストライク！」

返球を受け、バックスクリーンを見た。

154km/h

やっぱり調子がいい。体の。

で、ついスタンドを見ちゃうよね、って見たら後悔。愛ちゃんがよそ見したスキに男が、愛ちゃんの後

ストローに口をつける。気づいた愛ちゃんは照れたように笑って、もー、と怒ったフリ。

そしてすぐ、一切なにも気にせずストローに口をつけてしまった。

ぐ。

ぐぐ。

ぐぐぐ。

はっ。

サインに大きくなすぎ、また同じコースに同じ球だ。

またバッターは振らず、球審の手は上がった。

「ストライク」

155km/h

だから調子はいいんだよ。バッター、手が出ないし。

でも、心臓のドキドキは倍速ドキドキになる。なんでかな。

今度はスタンド見ないですぐサインを見たよ。真

ん中低めに、落ち落ちフォーク。ちなみに落ちフォークは、ストライクゾーンに入れるやつで、落ち落ちにはボールゾーンへ出すやつだよ。

OKとうなすぎ、クラブを頭の上へ、同時に左足を引く。

そこで、ついスタンドを見ちゃったらうわあああああ。

「OH！」

唇が。く、唇が。

あ、あ、合わさっている。間接じゃない。

テレビに映ったらどうするんだ！

映っていいとも？ よくないとも！

やべフォークになる、いやならない、いやすぐ投げなきや。

急せかされるように左足を上げて、ふみ出して、投げるコースはどこだっけああもう、ミットに投げりゃいいんだ。

「あ」

ボールが指の間から抜けた。

ボールは真ん中から大きく外れ、バッターの頭へ。

バッターは察して首を引きながらしやがみ込もう

とするが、遅い。

ヘルメットに当たったボールが大きくはね返る。

バッターは首をすぼめたまま、横むきに倒れた。

動かない。

人が集まってきて、バッターは囲まれていく。

え。

人の脚の間から、バッターの体が見える。

動かない。

動けって。

動いてください。

うごいて。

え。

え？

「大空！」

大きく体をゆさぶられた。

阿藤さんだった。

「え？」

「退場だ」

阿藤さんがベンチを指した。

「はい」

そうか。頭に当たったんだ。

オレはベンチへ歩き出した。

足の下がふわふわして、歩きにくい。人工芝がマシマロになったみたいだった。芝マシマロ。ま

ずそう。

ベンチに入る前、観客の声が聞こえた。

「殺す気か！」

空耳だったかもしれない。こっちはシャイニング

ス側のベンチだし。

いや、関係ないか。

止まりかけた足を動かすと、グラウンドから、小

さな歓声が上がった。

見ると、頭にボールを受けたバッターが立ちあが

り、コーチや選手たちになにか言っている。

それだけ見て、オレはベンチの奥へ歩いてった。

誰か、声をかけてくれたような気もするけどずっと遠くに聞こえて無視しちゃった。すいません。

なにかが振動する音がうるさくて目を開ける。

違和感いわかんがあつて起きあがると、自分の部屋の、ソファの上だった。なんでこんなところで寝てんだ？

じゆうたんで震えてる携帯を見つけて、ボタンを押す。

「はいもしもし」

「大空か」

阿藤さんだ。「二階堂にかいどうのことだが、検査の結果、

どこにも異常はなかったらしい」

「二階堂？」

「レッドアローズのだ」

ああ、昨日オレが頭におつけた。そっか、だからこんなところで寝てたんだ。

思い出したとたん、右手がびくん、と動いた。

「良かった」

落ちそうになった携帯を左手でおさえる。

「出場停止はないから、今日の試合も用意しておけよ」

「わかりました」

「じゃあな」

電話が切れた。

そのままソファに倒れて、目を閉じたら、ぼんやりしてきて、ぼんやり。

「遅れましたすいませーん」

急いでブルペンに入る。

「どうした」

コーチから声がかかった。「無理か？」

「いやいやいけますって」

オレが言うと、コーチはうなずく。

朝の電話のあと寝ちゃって、気づいたら夕方だっ

た。試合を寝すぎしそうになるとか、ありえないよね。まだまだオレなんていつでも即、二軍落ちの選手だし、危険球、退場やつてすぐ寝坊なんかしたら、とりあえず二軍に落とすか、つてなるよ絶対。やばいやばい。

モニタを見ると、六回の裏だ。3対0でリード中。急げ急げ。

オレは、村上が投げているのを見ながら柔軟体操を始めた。

「村上」

コーチが言うと、村上が視線をコーチへうつす。

「はい」

「七回、頭から行け。おい、大空も肩つくれ。八回はお前だ」

「ういっす」

八回はお前。

そうだよそうだよ。オレはまだまだチームに信頼してもらってたんだって。

そうだよそうだよ。きつとファンもまだ応援してくれる。

よし、そうだ、よし！

「気合だ！」

オレは自分の顔を、パーン！

「ドーン！」

誰かが言うと同時に背中にドーン！

反りながら振り返ると、張り手をした犯人と思われる村上容疑者が笑いながら走り去る様子が確認できました。

気合を入れてくれたのかな、村上。

「なんて言うと思うてんのか」

超いてえ。

村上アホだ村上アホだ、つてとなえながらオレはブルペンに入った。

「よし、投げろ」

マスクを外したキャッチャーが言う。

「阿藤さんじゃないっすか」

スタメンじゃないんすか。「さぼりっすか」

「バカなこと言っていないでさっさとやれ」

いきなり投げてきた球を顔面ぎりぎりでキャッチ。軽くキャッチボールしてから座ってもらった。

「いっきまーす」

腕をまわしながら言うと、阿藤さんのミットはど

真ん中。

おっけーっす。

振りかぶり、六割くらいの力で投げる。

阿藤さんの構えたミットにズバリ収まった。

阿藤さんは無言で返球する。また同じ場所にミッ

トだ。

今度は七割。

やはりボールはズドンとミットにズバリ。

今日も調子は悪くない。というか良い。

なんだ、いいんじゃない。

昨日があれだけ良かったからなあ、と思いで出をプレイバックしはじめたら、吐きそうになった。デッ

ドボールもそうだし、男をあさるバカ女子アナのバカップルぶりとか、気持ちが悪いですよ、公共の場所。キモいとかじゃなくて、気持ちが悪いです。

「一球」

阿藤さんが言って、ぐっ、とミットを突き出す。

オレは振りかぶり、とうりやっ。

ボールは構えたミットにズバリだ。

思わずバックスクリーンを振り返りそうになる。

ミスターズバリと呼んでほしいね。三遊亭ズバリさんゆうていを襲しやう名なしてもいいんじゃないだろうか。

「いい球だ」

阿藤さんが言って返球した。「いけそうだな」

「なに言ってるんすか。あたりまえじゃないっすか」

オレは言いながらグラブに収まったボールを見る。

よし。

今日も絶好調だ。

なんだなんだ。

びびってそんした。いやびびってねーよ。

今日もぜっこーちよー!

「フオーク」

阿藤さんが真ん中低めに構えた。

オレはいつものようにクラブの中で、人さし指と中指でボールをはさもうとする。

「う?」

ぴりっ、と電気が走ったような痛みがあつて、反射的に手を引く。

「どうした」

「なんでもないっす」

静電気せいでんきかな。五月に?

オレはまたボールをはさもうとする。

よし今度はなんともぴりっ。

無視して指の間に押しこんだ。

二回も連続で静電気なんてめずらしいな、と思いつながら振りかぶり、足を上げてふみこもうとしたときだ。

指の間が勝手に閉じる。

あつ、と思つたときにはもう左足をふみ出して、右腕がボールを投じるところだった。

オレはぎりぎり、飛び出そうになるボールになんとか指をかける。つもりがやっぱり飛び出た。

ぴょんと出てつたボールは天井てんじょうにぶつかると、阿藤さんへ落ちてきた。

阿藤さんは座つたままニスキャッチ。

「おい」

「すみません」

オレは笑つて謝つた。「すっぱ抜けちゃつて」

ほんとは笑えないんだけどね。

「おい、そろそろだ」

ブルペンの受話器を持つたコーチが言う。

「え、もう?」

「七回は表裏とどつちも三者凡退ぼんたいだった。もう八回が始まるから、すぐ行け」

コーチが言う。

言われて、オレだつて行く気はまんまんだ。

でも、すぐには足が出ない。

「どうした」

阿藤さんが歩いてきた。

「いや、なんでもないっす」

オレは阿藤さんとコーチに軽く頭を下げた。「じやあ行つてきます」

「抑えてきます、だろ」

阿藤さんが言う。

「え？」

「は？」

阿藤さんは不思議そうだ。「お前いつも言ってるじゃないか」

「あ、そっか。はい」

「なんか変だぞ」

阿藤さんがオレの顔をじろじろ見る。

「おい。急げ」

コーチがじれったそうに言う。

「あ、はい。抑えてきます」

オレは、バタバタとブルペンを出た。

マウンドへ走り出すと、オレの姿を見つけたシャイニングスファンが歓声を上げる。やあやあどうもどうも。おまたせしたね。主役はここだよ。

「おう。調子はどうだい」

キャッチャーの丸井さんまるいは今日もにこにこだ。

「はい。ストレートは150以上出ます」

「頼むよ大空ちゃん。昨日きのうのことなんて忘れて、ばばつ、とささつ、と、剛球封殺ごうきゅうふうしやくで頼むよ」

丸井さんがミットでスタンドを指す。

指した方向を見ると、スタンドに、剛球封殺 大空昇太郎、という手製のボードを持ったファンを見つけた。

「OKっす」

「よろしくう」

丸井さんは親指を立てると、走っていった。

今日もレッドアローズだから、たいした相手もい

ないしとっても楽だ。

というわけでプレイがかかってストレートストリートズドンズドン。

2ストライクですつ。

151km/h

154km/h

と快調そのものである。

丸井さんの要求は、左バッターの外へゆるやかに逃げるフォーク。遊び球あそびだまなしか。

無意識にごくり。

ボールをはさもうとするとやっぱり、ぴりつ、て人さし指と中指に刺激しげきがあった。

やばいっす。

でも無視して振りかぶった。

足をふみ出し、というところでまた勝手に指が閉じちゃう！

オレは丸井さんが、フォークが落ちたあとはこの場所、と想定しているミット目がけて腕を振った。

なんとかミットへ飛んでったボールはバットにはじかれ、強いゴロが三塁へ転がる。でも三塁手の仁に王おうさんは平然と捕とって流れるようにワンステップスローイングで一塁へ。

アウト。

オレはアウトになったのを確認して、丸井さんへ頭を下げた。

丸井さんはわざわざマスクを取って笑顔を見せて、またマスクをして座る。

やべー。

いや、やばくない！

バッターが立ち、地面をふみ固めてから、オレを見る。

丸井さんの要求は、ストレート。

言っとくけど、インハイだってインローだってアウトハイもアウトローも、四隅よすみどこだって投げられる人だよ、オレは。

ストレートなら。

インコース高めのストリートに、バッターはのけるようなスイングになった。

「ストライク！」

そんなに逃げなくなつて、デッドボールになんかなりませんよつ、と。

ストリートなら。

でも丸井さんはフォーク要求。マジすか。

オレはうなずき指がびりつ、となるもはさんで振りかぶつた。今度はちゃんと投げるもんね。

絶対指を閉じないんだ。

「うおおお」

投げてみせる、と強く指を開き続けるよう意識しながら腕を振ると、抜けた。

山なりボールがふんわりとキャッチャーミットへ飛んでいく。

腰くだけになったバッターは、ただ当てるだけのスイング。

オレはコロコロ転がってきたボールをひろつて、

かるーく一塁へ。

余裕のアウト。V!

タイムをかけて丸井さんが走ってきた。

「すいません」

先に謝ってみたが、マスクを外した丸井さんは怒つてたわけじゃない。顔全体でクエスチョンだけだった。ハテナ丸井。

「おいおいどうした大空ちゃん？」

「すいません。ちよつと抜けちゃって」

「だいじょうぶかいな」

「なにがっすか」

「昨日、大空ちゃん危険球投げたやんか。まだショックとか？」

ズバリ言ってくれる。

キャッチャーは、心づかいが大事ですよ。

「いえ別に」

「危険球経験は？」

「そういえば、プロになってからデッドボールも初

めてっす」

「おうおうおう」

丸井さんは鯉こいみたいに口をばくばくさせた。

「いや、オレ一軍経験少ないだけっすよ。それにスライダーとかカーブもあるんで」

「へなちよこスライダーとしょんべんカーブで一軍の試合に出れると本気で思てんなら荷物まとめていまずぐ球場出て行けや！　と思うけどどないやねんな？」

丸井さんはさつきからちよいちよい関西弁っぽいイントネーションを混ぜてくる。ウソっぽいやつを。

あんた、たしか関東出身関東育ちだろ。むしろ北関東なまりになつてるべきじゃないのか。

「タイミング外せれば平気っすよ」

「おいおいおい。お前、わしがちゃんとリードしとつたら平気っちゅうんかいな」

丸井さんはエセ関西弁をとても気に入ったようだ。

「そこまで言うんやつたらほんまにやつたろ、おお。」

よっしや、たのむでほんま」

エセ関西弁が楽しいのは言っている本人だけである、とここに記す。

「まかせてください」

オレが言うと、ほんまたのむでしかし、と軽くジャンプしてマスク位置を直しながら丸井さんは定位置にもどっていった。

しゃべらなきやいい人なんだけど。

それに、結果的には2アウトランナーなしなんだし。あんま気にすんなって。

左バッターが入って、丸井さんの要求は、インコースぎりぎり、ボールになってもいいからあまいコース厳禁げんきんのスライダーだった。おお。スライダー採用さいようだ。

うなずき、振りかぶって投球動作に入る。

手から離れる瞬間、はっとした。中指がお久しぶり、と言っている。あ、スライダー、今月に入つて一回も投げてない。練習ふくめて。

つまり、ちゃんと回転がかからない縫い目の手でたえて、しかもあまいあまいコース、というかつまりど真ん中に130キロくらいのボールがひゅー、カキーン！

振り返ると右中間まっふたつ。

バッターランナーはスライディング不要のゆうゆう二塁だ。

ホームのほうを見ると、丸井さんはマスクをつければなしたが、ほら見る、という顔をしている気がする。

というかしてるはず。

ドンマイをくれ。

まだ3対0だ、って言うてよ。

よし、自分で言うぜ。しょうがねえ！

次のバッターさん、いらっしやーい。

しかし丸井さんのサインは、カーブスライダーカーブスライダーと当てつけのような要求をくり返す。さっきのヒットでびびりまくってるオレは、あつ

という間にフォアボール。

2アウトランナー一塁二塁だ。

でもよしよし、打順はピッチャーだ。

『バッター交代のお知らせです。大嶋おおしまに代わりまして、バッター二階堂』

やっぱ交代ですよね。

って二階堂？

のっしのっしと出てきたのは、昨日オレがやっちゃった相手だった。

なんであいつ？

うーん。二階堂って打ってたっけ？

むしろ、代打だいだを出される側のキャッチャーなんじゃないかっていう。

レッドアローズベンチを見ると、去年まで六番を打ってた山久やまひさが見えるし。それ出せよ。いや、出してほしくないんだけど。ていうか二階堂もさあ、危険球受けて翌日に、試合出てくんないよ。オレはともかく、そっちは平気じゃないだろ。

丸井さんがストレートを求めているので、とりあえずセットから投げるけれども。

「ストライク！」

二階堂は振り遅れる。

フォーク不要説、浮上^{ふじょう}。

いらぬいんなら、なんとかなるな。なんだなんだ。びびらせやがって。

と外角低めにストレートを投げたら、こんどは当たった。一塁の外をボールが転がっていく。

たまたまかな、とまたアウトローに投げると、当たられた。今度はライナーで一塁側のフェンスにボールが命中。

まだ振り遅れてるけどこいつ、ふみこんできてる。内角はびびって投げられないと思ってるのか。ダメバッターのくせになまいきな。

なめんなよ。

でも丸井さんは外角要求なので、素直なオレは投げるし、二階堂は当てるし。今度は一塁のすぐ横を

ライナーが飛んでいった。

ストリートなら内角投げられるんだけどな。

今度丸井さんが外角要求するなら、久しぶりに首を振ろうかと思つたら、内角だった。

だがフォーク。

首を振る。

フォーク。

首を振る。

フォーク！

首を振る！

するとマスクを外した丸井さんが、口をばくばく動かした。

な、げ、ら、れ、な、い、な、ら、か、え、れ。

すぐマスクを装着^{そうちやく}し、ベンチを指してから座ると、ミットを構えてフォークのサインを出す。

オレはうなずいた。

最近^{ちじゅう}は地上波^{ちじょうは}の中継^{ちゅうけい}がないからって、口パクで好き勝手なこと言いやがって。CSで放送されてる

っつーの。

そいじゃ投げますよ。フオークなしでもいけそうだったのに。

ボールをはさむと、やっぱり電流みたいなものが指を刺激してくるけど、オレは無視してそのまま振りかぶってやったぜ。やべ、ランナーいたっけ？
まあいいや。

絶対におつけない。絶対におつけない。

オレはストリートを投げるつもりでふみこんで、人さし指のひっかかりも意識して投げた。

なぜすっぱ抜ける！

ふわーっ、と飛んでいったボールに、二階堂は予想してたのか腰くだけにならず、しっかりとためて、真ん中高めのボール球を振り抜いた。

思いつきり引っぱりやがった。

やばい飛距離、と振り返る。

ボール際だ。

「切れろ！」

白い点はまっすぐライナーで飛んでいき、黄色いボールに当たって大きくはね返った。

どよめきまじりの歓声上がる。

二階堂が両手をあげて満面の笑みでダイヤモンドを走り出した。

ちくくしょう。

ちくくしょうちくくしょう。

シンプルに内角外角へストリート散らしておけば打たれなかつただろうがっつーの。ちくくしょうエセ関西弁ダメキャッチャーが！

お前のせいで3対3の同点じゃねえかバカ！

いやオレのせいかな！

すいません！

「大空」

丸井さんがやってきた。「おしまいやで」

見れば、ベンチから出てきた監督が球審と楽しそうにお話していた。眉間に深いしわを寄せて。

園田さんが出てくる。

オレはマウンドから降りて、園田さんに頭を下げた。

「すみません」

「早えよ」

園田さんはそれだけ言って、マウンドへ行ってしまった。

オレは、ベンチのチームメイトに、すみませんした、と声をかけてさっさと奥へ引っこんで、シャワーも浴びずに逃げるように帰った。

『神様が帰ってきた!』

翌日のスポーツ紙一面は、上三分の二でケガからもどってきた笑顔の神田さんとちっちゃく山田、下三分の一に、同点スリーランを被弾したオレが、マウンドでバカ面^{バカ面}さらしてた。ところで神田さんはもう、頭ぜんぶ白髪じゃないか? 地毛^{じげ}なのにもうぜんぶ白髪ってやばいよな。いかついし、絶対抑えるし、名前神田だし、そりゃ神とか呼ばれちゃうよね。

もはやこわいわ。あと、山田の写真オレより小さくてざまあ。

他紙には村瀬アナの結婚がどうたらこうたらが一面にどかんと出てたなんてことはないし、相手の男はミュージシャンでこの不況に爆発的にヒット曲を飛ばし続けて、野球選手の、シャイニングスのオレの数倍も稼^{かせ}いでるらしいとか、ナンパするよりされちやいそうなルックスとか、そんなもの見てない。あんな新聞はゴミ袋の中に敷^しいて生ゴミの水分吸収に使ってやった、なんてこともないのだ。

とういか村瀬アナなんていない。あんなかわいい子はいない。あ、そうかCGか。最近の技術はすごいなあ。うっかり失恋するところだった。声も声優さんがやってるからあんなにかわいいんだね。

目から流れる汗がうっとうしいぜ。

さて、重要なニュースにもどる。

ひとつは新聞のとおり、神田さんと他一名が今日一軍登録^{とうろく}された。

もうひとつは、オレが一軍登録枠から押し出されて二軍に落ちたってことだ。さっき電話で言われちゃった。

「やべー」

ソファで力を抜いたら天井が見えた。

いままでの二軍落ちとはちがう。

これまででは、なんとなく一軍登録されて、出番なしで二軍落ち、みたいな感じだった。だから、オレが悪いだけじゃなくて、期待の戦力様が来ちゃったからしょうがないじゃん、って自分に言える部分があった。

でも今回は、一軍である程度投げた結果『ダメ』って確認できたから、二軍に落ちた。

これはなかなかきまずなあ。

でもでも、フォークさえきちんと投げられるようになれば、オレは一級のセットアップパーになれるよ。一年後輩の山田にも全然劣らない。それはわかった。それは収穫だ。ていうか山田に劣ったことなんて

一回もないですけど？

そうだよそうだよ。

なんかおかしいと思ったんだ。山田なんてしょせんドラフト五位だろ。三位のオレより期待されてないんだよ、いや能力低いんだよ、来年にはクビ、よし確定。なんかいまは、期待のセットアップです、みたいな顔で調子のとてるけど、たまたまだついの。そろそろ研究されてボコスカ打たれ出すだろ。

そしたら、フォークが復活したオレ登場。山田さよなら。

これだな。

おお、ちょうどいいじゃん。

略称が『三田』じゃなくなるけれど、大空園田神田だから、ベタにOSKとか呼ばれたらいいじゃない。

いいじゃないの。

オレはやれる。

まずは二軍でフォークの復活をやってやる。

それでセットアップ復活だ。
よっしや、コーチと練習だぜ。

2

「残念ですが、契約は今年で打ちきり、自由契約とさせていただきます」

「は、え」

「詳しい話は来週、事務所まで来ていただきます。それではまた連絡いたします、失礼します」

電話が切れた。

さっきまでの空腹感が消失。

いつもごちゃごちゃしてるオレの部屋が、なんか広く感じるよ。

えっと、自由契約って言われたよね。

自由契約ってことは、自由に他と契約していいよ、

ってことでつまりシャイニングスとしては、もう大空はいらないよ、ってことだ。

つまりクビ。

ゴト、と音がして、見ると携帯電話が落ちてた。手にはなにもない！ ザツツイリユージュオン。

アホか。

そしてマジでクビか。

でも、予感があった。

だってオレ、あの二軍落ち以来ずっと二軍だったから。

五月から十月まで。

去年だっておとしだって、優勝が決まった九月ころにはお試しで一軍登板とうばんさせてもらったのにさ。

今年はお試し期間にオレだけ完全無視だよ。他のピッチャーはお試しまくりだったのにさ。それに今年のシャイニングスは絶好調で、九月中旬ちゅうじゅうには優勝が決まったから、お試し期間は長めだったのにさ。ちなみにビールかけはテレビで観せていただきました

たわ。みなさん楽しそうで、特に山田くんがはしゃいでらっしゃいましたね。調子のんな。

まあビールなんか嫌いだしどうでもいいんだけど、個人タイトルがかかっている選手以外は柔軟にいろんな若手を試してたのに、なんでオレは二軍のままなのさ、と憤慨ふんがいしていたわけです。

心配していたわけです。
契約関係を。

これ本格的にやばいんじゃないか、と思うたび、五月に連続で抑えまくった幸せな思い出を胸に、だいたいじょうぶだいたいじょうぶ、とふとんの中で自分に言いかせて暮らしてた。

それってダメって思ってるってことだろ。

そんなことない！

そんな一人会話も今日でおしまい。

だってダメってわかっちゃったんだもんね！

ああ終わった。

終わったー。

ひっくり返って、テレビをつけたら愛ちゃんが出てきたのですぐチャンネルを変える。村瀬出てくんな！

ピポポッポとチャンネルを変えていたら、手が止まった。

野球選手の番組だ。自由契約になった選手を追ったドキュメンタリーだ。この人のやつは見たことある気がするから、再放送かも。

合同トライアウトに出かけるところだった。この選手はトライアウト不合格で結局引退いんたいするんだけど、そっか、その手があった。まだ終わりじゃないじゃん。トライアウトだよ、それがあったよ。

トライアウトの日程って、どこで調べるんだろ。事務所で自由契約の説明って言ったな。じゃあ教えてくれるかな。どうか。もう無関係な人だしな。

そうだ、いまの時代はなんでもパソコン、ネットで検索けんさくしてみよう、と思つて久しぶりにノートパソ

コンの電源を入れたら、床で携帯が震えだした。

また球団の人かと取ったら、表示された名前は阿藤さん。

「はいもしもし」

「おお、大空。元気か」

明るい声が聞こえてきた。にぎやかなざわざわが感じられるけど、外かな。

「どうも、優勝おめでとうございます……」

「なんだ元気ないな」

「はあ」

「球団から連絡あったのか」

阿藤さんの声のトーンがさがる。

「ええ。え、知ってんすか？」

「ああ。たまたま監督との話に出てきたからな。で、お前どうすんだ」

「どうするって、トライアウトっすけど」

ま、シャイニングスのバリバリレギュラーキャッ

チャー様は一生行かないような場所ですけどね！

「おお、がんばれよ」

「はい」

あなたの給料の1割以下で再契約してもらえようにな！

「じゃあ、フォーク投げられるようになったのか」

という阿藤さんの言葉にあああああああ！

フォークさえ、フォークさえあれば！

「あ、阿藤さん。ストレートはいまでもバリバリなんすよ。バリバリ」

「ああ。でフォークは？」

「フォーク、フォーク」

ちくしよ、フォーク。「ちくしよー！」

なんでフォークが投げられないんだよ。

切り札ふだなのによ。

「ちくしよ。オレのフォーク最高っすよね。あのフォークとストレートなら、一流の抑えにだつてなれますよね」

「ああ。いい球だ」

「阿藤さんだって、そうそう打てないっすよね」

「ああ。お前はコントロールもいいからな」

「ですよねー。神田さん、はわかんないっすけど、

山田よりは確実に上っすよね」

「そうだな」

「ですよね。ちくしょう。フォークがすっぽ抜けるからだ！ あのとときね、デッドボールのときっすよ、スタンドで愛ちゃんが彼氏とべたべたいちやいちゃしてたんすよ、たしか。いや、村瀬なんとかさんですけど。で、男にボールをぶつけてやろうと思ったんだったかな、たしか。いや、そんなこと思ってたかったかもしれないっすけど、ちくしょう、それが、ちくしょう」

ちくしょうちくしょうちくしょう。「あんなバカ女のせいでオレの、ちくしょう。なんでだ！ オレ、やめませんかね。シャイニングスの人もトライアウトくるんすよね。だったらまた再契約させて、どうしてもシャイニングスに来てくれって言わせてや

りますよ」

「うんズルズル」

「オレ、絶対やりますからね。とりあえず場所を調べようと思って、阿藤さん？ ラーメン食ってませんか」

「食って、ねえよ」

阿藤さんの言葉が変なタイミングでとぎれる。なんか飲みこんだような。

いやいや、阿藤さんが言ってるんだから。食ってない食ってない。

「だからまたオレのときにホームラン打って下さいね」

「ああ、ズルズルお前とバッテリー組むのをズルズル楽しみにしてるズルズルよ」

「ありがとうございます。あの、阿藤さん、やつぱりラーメン」

「え、ああ、ああ」

誰かと話してるのか？ 「大空。トライアウトの

場所だったら、トライアウト、開催場所、で検索すると出てくるってよ」

「はあ。誰かといえるんすか」

「山田とラーメン屋に」

「やっぱラーメン食ってるんじゃないっすか」

「電話中に食うわけねえだろ！」

阿藤さんが大声で言った。

そりやそうだ。

「すいません」

「気にするなズルズルごくり。オレもお前とまた同じチームになるのを楽しみにしてるパクパクあ、餃子こっちです」

「ありがとうございます。で、やっぱラーメン」

「じゃあな」

阿藤さんが電話を切ったのだが、切る寸前、大空さんやっぱクビっすか、と山田が半笑いで言っているのが聞こえた。まちがいない。

閉じた携帯電話を握りしめ、壁に投げそうになっ

たが、やめた。

山田のために怒って、携帯を壊して困るのはオレだからな。

山田のせいで困りたくないからな。

ちくしょう。

「ラーメンを食う！」

オレはどなって、カップラーメンを探した。

「ええ、それでは次、二番、大空選手」

「はい」

ボードを持った人に言われ、オレはトライアウト会場のマウンドにダッシュ。

三人の打者相手に投げることが可能だ。

「球種は？」

キャッチャーがやってくる。この人もトライアウトを受ける人だけど、さえない顔。目を閉じたら二秒で忘れそう。特に、目が一般人だな。

「カーブ、スライダーっす」

「フォークじゃなかった？」

さえないキャッチャーは、凡人から、やや研究熱心に評価アツプした！

「え、いえ」

「そうか」

さえないキャッチャーは、深くはきいてこなかった。

みんな訳^{わけ}ありだからね。やや研究熱心プラス、人を思いやる心も持つてるのか。おお、二つも特殊^{とくしゅ}能力持つてる。やるじゃないか。丸井さんは、思いやる心、持つてないぞ。他に必要なものはたくさんお持ちですけどね。

さえないキャッチャーから、悪いやつじゃないんだけどキャッチャーにクラスアツプ！

悪いやつじゃないんだけどキャッチャーが定位置について、バッターが構えると、悪いやつじゃないんだけどキャッチャーがサインを出す。

ストレートのサインなのだが、なんかかかったらしい。

そんなにゆっくりはつきり指を出さなくても見えるからさ。だからだと、そんなんだからクビになるんじゃないかと言いたい。

やつぱ、お前はさえないキャッチャーだな。クラスタウンだ。

オレは振りかぶる。

「せいやつ」

最高のストレートはストライク！

「ほいやつ」

ほればれするストレートもストライク！

「そりやさつ」

ぐんと伸びのあるストレートはどんなにがんばってもファールが限界。

「ていやつ」

一流のバッターでもヒットにできないよねこのストレート、ファール。

カーブのサイン。

あ、はい。

「くろうあつ」

カキーン。

きれいなヒットです。

「まだまだあ！」

次。

「よろしくおねがいます」

「こちらこそよろしくおねがいます」

「ろりやあ」

秋晴れあきはに映はえるストレートはファール。

「てい」

ゆううつな月曜日スライダ―はファール。

「えい」

レジでお金が足りなくて店員と見合う気まずさの

スライダ―は、カキーン。

おお、と声が聞こえる。

ボールはフェンスを越えた。

ホームラン。

「どんまい」

心づかいしかできないキャッチャーが声をかけてきた。うるせえよバカ。こっちはもう心が折れてんだよ。

でも、最後の一人にもちゃんと投げました。えらい？ 頭なでなでしてー。ちなみに結果は、オレがコントロールミスしたカーブをバッターは打ちそくなってピッチャーフライでした。しょぼいね。さすがクビになった選手同士の対戦だよ。うるせえバカバカ！

「終わった」

二つの意味で。

オレは一塁側のフェンスの裏に立つてぼんやりと、テストを受ける残りの人たちを見た。

残り、つていつてもオレは投手の二番目だったから、まだまだ、あと十五人くらい役立たずどもがいる。

オレよりは役に立つだろうけど。はは。

見てたら、なにかがこみ上げてきて両手で頭をかきむしっちゃう。ぐわしぐわしのぐるぐるでワイルドヘアーのできあがり。

「あー、終わったー、ちくしょー」

ヒットとホームランと、アウトだけどコントロールミス。

最悪だ。最も悪いと書いて最悪だ！

テストと関係なくオレに興味きょうみを持つてくれてた球団があったら声をかけてくれるかもしれないけど、それも今日のピッチングでダメになったかも。

「あー。あー終わった」

「おいおい、どうした」

顔を上げると、赤いウインドブレーカーを着た男がいた。

「あ」

オレは帽子を取って頭を下げる。「どうも、はじめまして」

やべ、本郷ほんごうだ。本郷保彦やまひこ。

本物だ。

いまもむかしも弱小球団のレッドアローズで、エースだった人だ。超エース。

十三年で二百五六か、それくらい勝ったというありえない記録を持つてる人だ。なにがありがたいかといえば、その間レッドアローズは、一度だってAクラスに入っていない。優勝どころか三位にすらなれてないチームで、どうやってそんなに勝ってたんだっていう話だ。

そんなチーム状態でほとんど毎年二十勝に近い勝ちを続けたんだから、すごすぎる。本郷選手を悪く言う人は聞いたことがないくらいだよ。

そして、本郷保彦が伝説になったのは引退だ。

現役げんぎを十三年で引退した原因は、ケガじゃない。不調だ。不調ってオレレベルとは全然ちがうよ？

勝ち数が九勝に減へっただけ。負けも減へって、たった二敗だし。調整の遅れでシーズンの最初から一軍にいなかったっていうのが原因らしいけど、チームも、

抑えを定着させようとして、勝ちゲームの九回に本郷さんを引っこめて抑え投手登場、被弾で本郷さんの勝ち消滅。こんな試合がいくつあったか。

しかもその年が初めての年間勝利数一桁だったのに、それだけでシーズンオフに引退を宣言したのだ。「もうピークを過ぎ、一年を通してエースでいられないと感じ、引退させていただくことを決めました」

かっけー。

かっけーけどもったいねー。

みんな、え？ まだ余裕でやれるじゃん？ みたいな反応ばかりだったし。

また翌年から勝ちまくるんだって、みんな思ってたし。

そんな引退だから、当時は大さわぎだった。

「ハデに打たれたな」

本郷さんが笑う。

「はは」

「笑ってる場合か」

「笑うしかないっすよ、ははは……」

「泣くな。ストリートはまあまあ良かったぞ」

あれでまあまあととか、どんだけだよ。

本郷さんが首をかしげる。

「たしか大空は、フォークが決め球だったよな」

「それは、あの」

言いたくないけど。

「ん？」

本郷さんがオレを見る。

そのときだけ、なんか、うっかり口から出ちゃった。

「投げられなくなっ」

なんか泣きそう。

必死でこらえる。

初めて誰かに、投げられなくなった、って言った。言っちゃった。

ずっと、めちゃくちゃでもなんでもはつきり言わ

ないできたのに。うわ、やっぱ言わなきゃ良かった。うーわうわうわミスったわ。言わなきゃ良かったーあーあーあーあーなんか自分で認めた気がすごいするわ。もう一生フォークが投げられなくなっちゃったんじゃないかの感じがするわ。うわ、言わなきゃ良かった。

「あの危険球からか？」

「あ、はい」

知ってんのか。家でゆったりまったりCS視聴しちようかな。

「大空のフォークは良かったよ。あれが投げられるんだったら、すぐにでもレッドアローズに来てもらいたいくらいだ」

本郷さんは軽く首を振る。

「なんかすいません」

「ストリートは良いとしても、あのスライダーとか一ブじゃあ」

本郷さんが息をはく。

「そうっすね」

オレはうなずいた。「本郷さんは、変化球もすごかったっす」

現役時代は七色の変化球と呼ばれるほど多彩な球種をあやつってた本郷保彦であった。緩やかなカーブと鋭く曲がるスライダー、大きく曲がるスライダーも。それにフォークやチェンジアップ、シュートや、あまり使ってなかったけどシンカーまでも。それに加えて伸びのあるストリートのコンピネーションで、あえて三振を狙わず凡打の山を築くピッチングだ。完投して百球程度、ということもざらだった。いまだったら絶対、エコなピッチングですね、とか言う解説者がいたはずだ。

「ところで、本郷さんはレッドアローズの監督、じゃないっすよね」

「来年から、レッドアローズのコーチになることが決まったんだ」

「おめでとーざいまーす」

オレは頭を下げた。

「どうだかきかないのか」

本郷さんが言う。

なにが？ とオレは顔を上げた。

あ、そっか、トライアウトの結果か。

「無理っすよね」

今日のオレはバッティングピッチャー！ 「さすがにわかってます」

「これからどうするか、決めてるのか」

「ええ。二度目の合同トライアウトもあるんで」

「二度目はもっと難しいぞ」

「はい。でも、平気っす」

「就職口でもあるのか」

「いえ」

オレは首を振った。「来年もトライアウト受けるんで」

「ん？」

まあ、そんな反応だろう。

プロでなくなつて、さらに一年経つたらどうなるか。

練習環境は悪くなるのはまちがいない。

そもそも、そのとき自分がなにをどうしたらいいのかさっぱりわからない。大学とか、実業団チームに声をかけていいもんなのかな。プロアマ規定きびとか聞くけど、自由契約選手用の規定があるのか、とか詳しいことは全然知らないし。独立リーグとかもあるよな。入団テストが間に合うのか知らないけど。で、レベルも絶対さがる。でも、もし入れてくれるんならありがたいと思つてますよ。

なぜなら日本プロ野球にもどるつもりだからだ。

絶対。ぜったいのぜったいなのだ！

「絶対プロにもどるっす。他の人は、これがラストチャンスのもりかもしれないすけど」

「きついで」

「はい」

うなづく。「来年も、あ、再来年くらいまでは受

けるつもりです。それでも落ちたら、さすがに……。金もなくなるだろうしなあ。いや、ウソです！ 絶対プロにもどります！」

オレが言うと、本郷さんは小さく二度三度とうなずき、遠くを見た。

「そうか」

本郷さんは視線を遠くへ飛ばす。

沈黙だ。

さらに沈黙だ。

あ、これって、もう話は終わったってこと？ 察

して去れ、みたいな空気を出してる感じのな？

じゃおつかれっす、と思っただけど、ほんとはまだ終わってないんだったらやばいな。大空？ あいつ能力ない上に態度も頭も悪いからやめとけ、なんてうわさが定着したらやばすぎる。

どうしよっかな。

「大空」

「は、はい」

本郷さんはまだ遠くを見ている。

「お前、プロとしてやるためだったら、なんでもやる気にいるか？」

話、終わってなかった。あつぶねえ、セーフセーフ。

「え、はい」

オレは大きくうなずく。「もちろんっす」

「本当に、なんでもか」

本郷さんはまた言う。

「はい」

だからそうですって。「まあ、プロにもどしてやるけど死ぬ、とか言われたら嫌ですけど」

本郷さんがじっとオレを見る。

つまんないこと言ったな、と後悔。

「死ぬのは嫌か」

「は？」

思わず言った。「だって、プロにもどっても死んでたら意味ないじゃないっすか」

「命がけでトレーニングをする気はないのか」

「それはもちろん、命がけですよ」

オレが言うと、本郷さんはうなずく。

さつきからなに言っただこの人。やっぱ、大手の頭の中は、ある意味どうかしちゃってんのかも。

「命がけでやるなら、レッドアローズに推薦すいせんしてもいい」

「マジっすか」

オレは礼を言いかけたけど本郷さんは続ける。

「なにか紙あるか」

「はい。ええっと」

ズボンの後ろポケットに入れておいた、トライア

ウトの集合場所や時間などが書いてある紙を出した。

「お前にその気があるなら、明日午前七時にここへ来い」

そう言いながら本郷さんは紙の裏にボールペンでなにか書く。「泊まりで練習する環境を用意してやる」

「え、すみません、ありがとうございます」

なんだなんだ、トントントン拍びやくし子こだな。練習環境まで用意してくれるのか。いい人だ。

ん、でもこれってまだ、レッドアローズ加入かにゅう決定ではない？

育成いくびく枠かでも全然かまわないんですけど、って言うておこうかと迷ってたら、じゃあな、と本郷さんはバックネット裏に歩いていっちゃった。

3

指定された待ち合わせ場所には午前七時に来い、って始発で行っても無理な時間だったから寝台列車しんだいで出発した。

初めての寝台列車だけど期待でいっぱい。なぜなら、二段ベッドの下段の美女と仲良くなって「一緒

のベッドでお話でもいかがですか」とオレが誘うと「はい」とやってきて「あ、でも、みなさんいますから静かにしないと」なんて強引に二人でふとんをかぶってごそごそ「あの」「だいじようぶ、オレに任せて」「あ、そんな」「だいじようぶ、ここはやさしくなでなで」「あ。あの」「ほらオレのも」「なんて立派うっとり。ラブ」「今夜のディナーは長くなりそうですね」となるからなんだけど、よく考えたらいざこざがあつたら面倒だと思つて個室チケット購入済みだった。そもそも、男女で上下のベッドになることはあるの？

しょうがないから今夜は駅弁食べくらべだ。奥さん、近ごろはいろんな駅弁があるんですよ、ほらマツタケ弁当。まあ、だんなよりもずっと立派な……。個室は意外に快適で、夢は無料で見放題だったけど、起きたら目的地の駅を発車しそうになつてる！急いで降りて、駅舎からジャージ姿で走り出たオレです。

「オレ、大空です！」

「なにやってんだ」

見ると、本郷さんが歩いてくるところだった。

「ぎりぎりだぞ」

「オレもそう思ったんすけど、駅員さんが絶対間に合うぜ！ つて親指立ててたんすよ。JRに任せろつて」

実際に合つたし。

「どうする、朝飯食つてくか」

本郷さんはアゴで駅前の店を指した。のれんに定食屋つて書いてある。店名？ 変なの。

「昨日の夜、駅弁食べくらべやったんで平気つす。

それにぼろい、いや年期の入つた、いやいや、歴史のありそうな食堂だし、オレなんかにはもつたいないつす」

「そうか」

本郷さんは首をかしげてから、食堂の前を通りすぎてオレをロータリーのはしっこに止めた車の前に

案内する。

「荷物入れて乗れ」

運転席にさっさと乗ってしまった。

田園風景の中、十五分くらいで山のふもとに到着し、コンクリートロード終了。ここからは歩きだ。

「そういえば、合宿中にトライアウトの結果はどうやって知ったらいいんすかね」

まだ道は平坦だ。

「それなら問題ない。どのチームも、レッドアローズも、フォークが投げられなくなったお前に用はないらしい」

「そうっすか」

なんてひどい言いかた。打ちのめされちゃうよ。

ロープウェーこちら、という立て札のとおり道を歩くと、ロープウェー乗り場があった。

そこからロープウェーで山を登って到着した、と思ったら、今度は山道歩きだ。今度はかなりかたむ

いた道です。

もう、三十分は歩いてる。

道の片側にはずっと薄汚れた黄色いロープが張られて、本郷さんはそれに従って歩いてるみたいだった。

オレはトランクを抱えて歩く。トランクの底のコロコロは、なんのためにあるんでしょーね。山道用トランクとかないのかな。

「もうすぐだ」

本郷さんが言うとすぐ、道が開けた。

木々の間の道が広がり、建物が現れた。

壁や屋根が丸太の、立派な一戸建てだ。二階建てではないけど、高さ一メートルくらいの土台の上に乗って建てるから高く見える。でも、一戸建てっていうのもなんかちがう。イメージが。ペンション。いやちがうな。

「このコテージが宿舍だ」

「コテージだ！」

「なんだ？」

本郷さんはオレを不思議そうに見た。「荷物はそこに置け。とりあえず行くぞ」

本郷さんに言われたとおり、玄関に通じる階段にトランクを置いて、また二人で歩き出す。

歩き出して気づいたのは、今度は、道の片側には濃い緑のロープが張られてることだ。黄色で統一すればいいのに。なかったのかな。計画性に欠けておるな。

「言ってくれば」

ロープ買ってきましたけど、と言おうとしたら、なんか本郷さんが語りだした。

「野球の練習において、常識というのはどんどん変わる。様々な学問が進化し、過度な負担をかけずに大きな結果を生む方法がどんどんうまれてきている。それはすばらしいことだ。だが、俺は思う。うさぎ跳びが主流だった、あのころだ。練習中に水を飲むではならない。登板後の投手は肩を冷やささないよう

しっかり温めておかなければならない。いまとはちがう常識にあふれていたあのころだ。あのころにうまれた怪物には、もう出会えないんじゃないか、と俺は思う。二度と四百勝投手は出ないだろう。それどころか、半分の二百勝投手も危うい。選手寿命はのびるかもしれない。壊れる選手の数も減るだろう。それは良いことだろうが、同時に俺は良くないことではないかとも思っている。誤った方法とも言える手段で、過剰な負荷によって鍛えられた人間こそが到達できる場所があるんじゃないだろうか」

視界が開ける。「そして、これが俺の答えだ」

左右の木々が急に途切れた。そしてオレの五メートル先から地面も途切れた。

途切れた地面からは橋がのび、ずっと向こう、数十メートル先の崖とつながっている。

ただ、橋といってもがっちり固められた橋じゃない。不安定な吊り橋だ。

高さ十メートルはある太い支柱がこちらと向こう

に二本ずつ建てられている。向こうとこっちの支柱の先端せんだんをつなぐのをセットとして2セット、ケーブル？ ワイヤー？ 名前は気にすんな。ぶっとくてがんじゃないなロープ的なやつが、それぞれの支柱のてっぺんをつないでる。

大きくなるみながら対岸の支柱と先同士をつないでいるぶっといロープ的なやつから、一定間隔かんかくで、ぶっといやつよりはぶっと細い、ワイヤー？ が降りてきて、それぞれが長く続く橋とつながり、吊つてた。橋の幅はばは一メートルちよつと。すれちがうならお互い体をかたむけないとね、つてくらい。

四つんばいになって谷をのぞくと、ずっと下で川が流れてた。

「高いっすねえ」

テレビでやってた、橋の真ん中でバンジージャンプができる、という名所を思い出す。ここでもできるな。金をもらってもいやだけど。だって失敗したら死ぬじゃん。

冷たい風に顔をなでられてぞくぞくしたので顔を引っこめる。

「これ、つくりかけなんすか」

オレは橋を指して本郷さんを見た。

ぶっといロープ的なやつから出て橋を吊つてるワイヤーみたいなやつはだいたい、一メートル間隔かな。それだけなんだよね。手すりがない。ちよつとバランスをくずしたらワイヤーみたいなやつにつかまるしかないけど、手すりじゃないだろうから体重かけてもいいのかどうか。

そして最大の疑問は足場あしばだ。

足をのせる、橋板はしいた、とかいうんだったか。それがない。スカスカもいいとこだ。

見た目、ハシゴみたいな横棒があるだけで、その棒も鉄棒みたいに丸い。わたれ、イコール落ちろ、だね。

「まさかこれをわたるんじゃないっすよね」

「いや」

本郷さんはやりとした。「そのまさかだ」

えー、やだー。

「いやあ、これじゃあ歩けないっすよ」

「歩くんじゃない」

本郷さんは橋ぎりぎりまで進み出る。

「危ないっすよ！」

「ここなら死にやしない。お前も来い」

本郷さんが手招きする。

断ったら帰れ、と言われそうなので四つんばいにならんだ。

「ああ」

小さな段差があった。

ちょうど橋のスタート地点と重なって、橋の始まりの真下、一メートル下に、縦横一メートルほど、崖を削ってつくられたらしい出っばりがあった。

「そこに下りろ」

「マジすか」

「マジだ」

「はい」

飛び降りたらおととととと、ひゅー、って落っこちそうだったから、飛び出さないよう後ろむきになってそっと、慎重に段差に足をついた。

「前を見ろ」

無理を言う。

深呼吸をして、真上の橋の棒をにぎりながら、回れ右をした。

おおお。頭の上にあるハシゴが対岸まで続いていて、地面の先はない。なんか、天地が逆になったような、空のはしっこまで上がってきたような、不思議な感覚だ。

「天橋立つすね」

「全然ちがう」

本郷さんの声が頭の上から聞こえる。「お前には、この吊り橋うんていをやってもらう」

「は？」

「この橋は、足ではわたらない。手でわたるための

ものだ」

「ちよつと意味がわかんないつす」

オレはのけぞつて本郷さんを見る。

「この橋は、うんていだ」

「うんていって、学校にあるあの？」

「そうだ」

本郷さんは大きくうなずいた。

うちの学校にはなかつたんすけどねー、つて言つたらなぐられるかな。

さつき思った、ハシゴみたいな横棒つて、まんまじやん。

棒をにぎりなおす。

ゴールは遠い。

「これで上半身の筋力きんりよくと精神力を鍛えろ」

本郷さんがおっしゃった。

「これを」

吊り橋は真上にある。

はるか下には川が流れ、吹きつける風はとても冷

たい。ぜんぜん動かなくなつて、つかんでるうんていが風にゆらゆらゆらなのは、はつきりわかる。

現実感がうすい。これがどんなことにも本気にならないバーチャル世代か。世代でくるなバカ野郎。「わたりきつたらロープに従つて走れば宿舍までもどれる。迷う心配はない。できれば昼までには帰つて来いよ」

本郷さんが、じゃあなと行つてしまひそうになる。「あのあの本郷さん」

オレ急いで振り返つた。

「なんだ」

本郷さんは顔しか向けてくれない。

「命綱いのうな、ないつすよ」

「使わない」

即答そくたうだった。「死ぬ気でやれと言つただらう」

死ぬ気でやれ。

ほんとに死ぬよ？

「落ちたら死にませんかね」

「そうだな」

本郷さんは言い、それ以上言わない。

風が吹きつける。このふるえは寒さだろうか。

「でも、あの、こんな無茶なトレーニングしても、危険なだけなんじゃないっすかね」

「かもな」

「かもなって」

「無意味はいやか」

「無意味に死ぬのはいやっす」

「そうか」

本郷さんは言う。

わかってくれたか。

「ところで大空。お前、トライアウトの前、フォークの練習をしたか」

「は？」

なんの話だ。「上がりたいんすけど」

「したか」

「はい当然」

そりゃそうだ。

「でもダメだった」

「はい」

「他の変化球も」

「はい」

「それで、ストレートはどうした」

「ちゃんと調整しましたけど」

早く上がりたいんだけどなあ。この地面、くずれないだろうな。しっかり棒をにぎにぎ。

「ストレートをより磨き上げようとしたか」

「はい」

「160キロ、出そうとしたのか」

「それはしてないすけど」

「なぜだ」

「え。えっと、シャイニングスにいたとき、いいときで155キロくらいだなってわかったんで」

「本気で160、出そうとしたか？」

「いや、したことはありませんけど、ダメだったんで」

フォークを覚えるほうへいったんじゃないっすか」
出るんだったら出すし。

「お前、どうなりたいんだ」

本郷さんが近づいてきた。

「どうって、プロで、プロのピッチャーとして」

「なんでもやる気で、死にものぐるいで、そんなものになりたいのか」

「そんなものってどういうことっすか」

かちんときた。「そりや、本郷さんは格がちがうからわかかないでしょうけど」

「お前の気持ちなんて知りたくはない。だがな、お前がどうなるかなんて誰も知らん。俺がどうなったか、最初から知っていたやつなんているか？ 俺がなにもせずにいたと思うか？ どうだ」

本郷さんがしゃがんでオレに顔を近づけてきた。

「160キロ出して、フォークも投げて、スライダ―もカーブもシンカーもシュートも、ナックル、パーム、カット、チェンジアップ、なんでも投げられ

るピッチャーになんてなれないと決めてるのはお前だろ」

本郷さんが間近で言う。

「そん……、え、じゃあ、なれるんすか。信じれば」

「なれないだろ」

本郷さんがすぐ言う。

「はあ？」

「なに言ってるんすか」

「信じればなれるなんて、考えることを放棄してただけだ」

「じゃあどうしろって言うんすか」

「好きにしろ」

本郷さんは立ちあがった。「ロープを逆にたどってロープウエーに乗れば帰れる」

「いやいやいやいや」

「いやいやいやいや」

「ちよっと待って下さいよ」

「あの、じゃあ、ちょっと時間を下さい」

「時間？」

本郷さんは笑った。「お前の一生だ。時間なんて使いたいだけ使えばいい」

本郷さんは後ろを向いて歩き出す。

え。

あ、なんか言わないと。

「そうだ」

本郷さんが立ち止まった。「そのうんてい、わたれた野球選手は一人いるぞ」

「わたれなかった人はどうなったんすか」

「一人しか挑戦してないからな」

本郷さんが軽く笑う。

「誰っすか」

「俺だ」

本郷さんは前を向き、歩いていった。

もどつてこない。

オレは谷に向き直る。

冷たい風が強く吹いた。目に見えて、吊り橋が右へゆられ、もどつて、大きくうねるようにゆれる。

風がおさまっても橋はまだゆらゆら。

棒をにぎってた手を放して見ると、じつとりと汗ばんでる。

ごくり。

まさにごくり。

まだ足は地面にある。

もどるなら、帰るなら。

死にたくないなら、いまだった。

本郷さんがこれをわたったって、本当に本当の話だろうか。

橋、うんていは、サビがういている部分も見あたらない。ピカピカで新しいように見えるけど。

サビ取りとかしたかもしれないし、なんとも言えないか。

急に愛ちゃんの顔が浮かぶ。

ああ、なんであんなやつと。

それはイケメンで才能ある金持ちだからだ！

オレは野球しか能がないのにクビになっちゃったからさ！

冷たい風が身にしみる。

ちつくしよう。

前を見ると、長く続くうんてい。

下を見ると、つて見なくていい。見ないほうがいい。
い。

なんでこんなことしなきゃならないんだ。

なんでこんなことになってるんだ。

やりたくない。

やりたくないよー。

でも、オレはうんていをにぎった。感^{かん}触^{しよく}をたしかめ、腕に力を入れて足を浮かせたり、つけたりしてみた。

わかつてることは、今年のトライアウトに落ちたオレは、来年以降も絶望的だということだ。来年までにフォークが投げられるようになりたいと思うけ

ど、難しいだろう。シャイニングスにいてなにも効

果が出てないんだから。しかもこれから練習環境も悪くなるっていうんだから、冷静に考えてプロ復帰は絶望的だ。

絶望的なんだけど、オレはプロ復帰をあきらめるつもりはない、っていう。

野球しかできないし、野球以外なんてやりたくない。
い。

愛ちゃんのお泊まりデートだって、フォークが投げられなくなったことに比べれば、たいしたことない。全然強がりじゃないんだからっ。

じゃあ仮に、愛ちゃんと結婚できるけど野球をやめなければならぬとする。

……幸せだ。

「でも愛ちゃんはいつと幸せになるからむりー！」

幸せになるからむりー。山が彦^{ひこ}だった。

もうオレには野球しかない。

野球を続けるには、並の練習じゃ無理だ。

じゃあどうするか。

ああやだなあ。

オレは前に手をのびし、棒をつかんだ。体がななめになる。

足を地面から離れた。

「うお」

体が前後にゆれる。

安定させようと全身に力が入るが、橋自体のゆれもあるから、何秒待ってもゆれは完全には収まらない。

うーん。もどっちゃおうかな。

いまならまだ簡単にもどれる。足を後ろへのぼせば出っばりに引つかかるだろうから、体を引きよせ出っばりに立つ。それだけで、命が保証される。命がかかっているからこんな動作も油断できないけど、前に進むことに比べたらなんでもない。

オレは前の棒をつかんだ。

前だ。

次の棒をつかみ、体を引きよせる。引きよせながら、次の棒をつかむ。

どうしても、次の棒をつかむとき、片手の時間がある。それがすごいきつい。この右手が、左手がすべったら。

全財産かけたギャンブルをやっても、こんなに緊張ちやうしないだろう。

手に汗がにじむ。冷たい汗だった。

また風が吹いた。弱いけど、冷たい。筋肉が冷えそうだ。

棒をつかみ、棒をつかみ、棒をつかむ。

下は見ない。

さつき見ちゃったけど、知らないフリだ。

前だけを見る。下はない。横もない。そうだ。いまオレの前にあるのはうんていだけだ。

うんていは、リズム。

一、二、一、二。

「うわっ」

汗で、つかみかけた右手がすべった。

死んだ、と思つたら左手が残つててセーフ。片腕でぶらーん。すぐ右手で棒をつかんだけど大きくゆられたときに、谷底たにぞこがよく見えちゃった。えへへ。

目の奥に谷底の残像ざんぞうがくつきり！

うわー。

でもやる！

首だけで振り返ると、まだ半分だった。

半分。

頭のどこかでは、足が離れてからもまだちょっと、もどれるつもりでいた。入り口の出っぱりは、いつまでもオレにおかえりー、って言ってくれる気でした。

でももう、前に行こうがもどろうが、距離は変わらない。

同じだ。

手を前に出そうとするが、出なくなる。

リズムは、あれ？ 忘れちゃった。

汗がにじむ。手を横にずらして、棒のまだ汗あせに濡ぬれていない部分に汗を広げてごまかした。

前だ。

「オレはプロ野球の選手なんだぞ！」

うんていくらい、なんでもない。

できて当然！

死んでたまるか！

オレは腕を動かし、前の棒をつかんだ。

よたよたとオレが近づくと、宿舎の前の階段で読書中の本郷さんが、本から顔を上げた。

「行ってきました」

「遅い。とつくに昼すぎだ」

「すいません」

オラフラフラ。

吊り橋つりばしうんていをなんとかわたり終えて体力と精神力を激減げきげんさせたオレを待ってたのは、山道ランニ

ングだった。

本郷さんの言つてたとおり、山道にはロープが張られててそれに従つて進むだけで良かった。地図的には。

体力的には、それはそれはたいそうな負担で。

道はゆるやかに下つていき、これならそんなに疲れないな、と思つたところに登り坂。考えてみれば、うんていのスタートとゴールが同じ高さだったんだし、そりやそうだ。

そもそも道つていってもロープが張つてあるから道つてことになつてただけだからね。ロープ消えたらオレ、ただの遭難者そうなんしゃだったよ。

さらにところどころ、倒れた木の上にロープが通してあるようなアスレチックゾーンもふんだんに盛りこまれてたし。強行突破きやうとくぱすぎる。

やがてたどりついたのは、幅が二メートルくらいで流れもおだやか、深さは足首までの小川のほりだった。これが成長するとあの凶悪な谷川になるん

ですな。ここで飲んだ水がまたうまくて、日本十清流のひとつと認定！ 思いつきがお飲みした。ぐびぐびぐびのごくごくだ。腹がたぶたぶたうぶになつて後悔はしたけど、とにかく川をわたり、宿舎までのアップダウンをのりこえて生還せいかんした。

ロープを張つたのは本郷さんだろうか。一度通るだけでもあの年齢にはきつついと思うんだけどなあ。

「昼飯は豚汁とんじゆとおにぎりだ。台所にあるから食つておけ」

「はーい」

オレヨレヨレで宿舎に入った。

吊り橋うんていきつい。

そこからの山道きつい。きついきついきつい。山道なんて普段通らないから脚がばんばんだ。うんていで使つた腕のほうが筋肉疲労はまだましだった。

「おお……」

台所へ行つてみると、コンロの横に白い山が。

「おにぎりタワー！」

おにぎりタワーはおぼんにのっている。土台として下二段は俵形、上段が三角おにぎりという、無数のおにぎりで形成されていた。

神よ！

本郷さま！

さらにタワーの横には鍋に入った豚汁あり。お椀によそってずずー、うまい。

ああ、あわわわ。

おにぎりさまが、おにぎりさまがオレをごらんなっていらっしやる。

たくさんのおにぎりさまが、オレのようなゴミにほほえみかけてくれている。

おとおお。

おとおお！

「うおおおおおおにぎりだ！」

おにぎりだ！ おにぎりだ！

せいやっ！ せいやっ！

せいやっ！ せいやっ！

おにぎりせいやっ！ おにぎりせいやっ！

せいやっ！ せいやっ！

せいやっ！ せいやっ！

おかがせいやっ！ 梅干しせいやっ！

焼き鮭せいやっ！ こんぶでせいやっ！

本郷せいやっ！ お料理せいやっ！

お上手せいやっ！ お上手せいやっ！

ほっぺたおっこちおっこちこちこち！

豚汁せいやっ！ 豚汁せいやっ！

おにぎりせいやっ！ おにぎりせいやっ！

豚汁おにぎり豚汁おにぎり！

豚汁おにぎり豚汁おにぎり！

豚汁汁汁おにぎりぎりぎり！

汁汁汁汁ぎりぎりぎりぎり

汁汁ぎりぎり汁汁ぎりぎり！

汁ぎり汁ぎり汁ぎり汁ぎり！

おにぎりないぞっ！ 豚汁ないぞっ！

ないぞっ！　ないぞっ！

ないぞっ！　ないぞっ！

「座って食べ」

本郷さんが入ってきた。「おい、もう全部食ったのか」

「消えました」

オレが言うと、本郷さんは笑った。

「いいことだ。食器を洗ったら出てこい」

「はい」

今度は明太子めいだいこもほしいな、と赤くて辛いからぶにぶにをイメージしながら食器を洗って外に出た。

「もうとつくに午後だが、午後は別のことをやってもらう」

本郷さんが歩き出すのは吊り橋とは逆方向だ。

今度のロープは青で、森の中を五分くらい進むと木が途切れた。

「これは」

目の前には広場が。

内野ないやくらいのスペースが、木々の中にぽっかりと

あった。広場の奥には、茶色い屋根の小屋が一軒。

宿舎よりもずっと小さくて、中はせいぜい六畳じゅうま間

かな。広さ的には、風呂ふろトイレキッチン収納なしで。

その小屋を守るように、高さ三メートル、幅五メートルくらいのネットが張つてある。

「今日から、ここでお前の体をつくりかえてもらう」

本郷さんが歩き出すので、続いた。

小屋に向かう。ネットを右側からまわりこむと、小屋のドアが見えた。

本郷さんは鍵かぎを開けるでもなくノブをひねり中に入る。すぐに、キャスターのついたカゴをガタガタさせながら押して出てきた。

中には未使用なのか、真っ白い硬球こうきゅうがぎっしり詰まっている。上にはクラブが二つ、それとなにかがのつてた。

「今日は投げ込みをやってもらう」

「投げ込みっすか」

やっとまともな練習だよ。本郷道場へは合格、つてことだね。

「そうだ」

本郷さんは、ボールの上、クラブとならべて置いてあったものを持つ。350のペットボトルの側面に取っ手と引き金をつけたみたいいなシルエットのそれは、スピードガンだね。

「このスピードガンで測る^{はか}」

ピンポーン。スピードガン、おみごと。

「ある球速に達しなかったらそのボールをノーカウントとする。球速は、140キロだ」

「え、140？」

「それくらい出ていなければ意味がない。あそこからだ」

と本郷さんが指した場所は、フェンスから約二十メートル、たぶん18・44メートル離れた場所だ。

土が盛り上がり、中央には白色のラインが引いてあ

る。

「あそこから、フェンスに向かって四百球投げる」

「え、何球すか？」

念のため聞き返す。

「四百だ」

聞きちがいじゃなかった。いや、わかってたけど。

「あ、はい」

「言っておくぞ」

本郷さんはボールの入ったカゴから手をはなし、オレを見る。「やめたくなったらいつでも帰れ。俺は止めない」

「オレ帰りませんよ」

キリッ。「なんとかするんで」

「じゃあ、まずキャッチボールからだな」

本郷さんがカゴの上のクラブをとった。

ららららー。

あんな力いっぱい、四百球も投げたの初めてだよ

ー。

ららららー。

夜のハンバーグはおいしかったけどねー。

本郷さんは定食屋さんにもなれるねー。森の定食屋さんへいらっしやい。みたいな。

るるるー。

右腕が張ってるよー。

右腕だけじゃないよー。

あーもうやだよー。

眠いよー。

すぴー。

すやすや。

4

ジリリリリリリ！

「火事だ！」

とベッドから飛び出すと、音が止まった。

夢？

「ふわああーあ」

眠かったのでそっとベッドにもどるとまた大音量がおそってきたので、床に立つ。壁の時計はまだ午前五時半だった。

まだ夢が思い出せる。夢の中でも吊り橋うんていだったよ。

あと数本、棒をつかんで進めば反対側の段差に足が届く、というところで、つかんできた棒が橋から外れ、オレの体が宙に舞いああああージリリリリリリ、はっ、火事だ！

部屋の中はひんやりしている。

山奥って感じた。

寒いから寝室を出るとそこはリビングで、本郷さんがテーブルに皿を運んでいる。

「おはようございます」

「遅いぞ。ほら食え」

とつくに起きてて、食事まで用意してくれてるなんて。

これでもし本郷さんが女でかわいくてスタイル抜群でオレのことが大好きだったら文句ないな。

丸太の側面をスライスして寝かせた長い椅子に、向かい合って座る。

二人きりのムーディーな丸太のコテージは、恋人と泊まりにくるなら最高だろう。

ああもし本郷さんが女でなんたらかんたら。

要するに愛ちゃん！

忘れちまえよそんな女！

「どうした」

本郷さんが見る。「食べられない野菜でもあったか」

「い、いえ」

朝食はシチューとながーいフランスパンだ。このパン、妙に長い。オレが手を広げたよりもさらに長

いのだ。まだ他に二本、テーブルに置いてあった。

「いったきまーす」

腕が重い。が、うまい。

食事の用意とせんたくなどは本郷さんがやってくれるらしいので、よろしくおねがひした。できるだけやらなくてもいいことはやらない主義である。これでもし本郷さんが女、いやもう本郷さんのままでも特に不満はない。ずっと二人きりはいやだけど。皿洗いだけはやるよ。

あの大エース本郷保彦に家事をさせてまで練習をしているとは、いい身分になっちゃったもんだ。

「出てるぞ」

本郷さんが先に行ったので、急いで皿を洗って着替えて外に出た。

「うわ」

顔がこわばるくらい、冷えた空気が。「すんません遅れました」

「よし。行くぞ」

本郷さんは歩き出す。

てつきり、青のロープに行くんだと思ったら、
緑？ 今日のはあの小屋から別の運動用具が出てくる
のかと思ってたんだけど。

「本郷さん」

「なんだ」

「いえ」

オレが言うのをやめると、本郷さんは首をひねっ
て歩き出す。

緑ロープの道は、吊り橋うんていだった。

「本郷さん、これは昨日やりましたよ」

オレはすっかりニヤニヤだった。

早起きして寝ぼけてたのかな、大エースさん。ニ
ヤニヤ。

「ああ」

でも本郷さんは平気な顔だ。

「え、今日もすか」

「ああ」

本郷さんは軽く言う。「ん？ 帰るか」

「いや、帰りませんけど」

オレは首を振った。しかし、やります、という言葉
葉がすぐに出てこない。

「吊り橋うんていは毎日やってもらう」

本郷さんは言う。「吊り橋うんていは日課だ。あ
あ、帰りはうんていじゃなく、ちゃんと山道を帰っ
て来いよ」

「はい」

言われなくてもそうしますが。

「じゃあな」

本郷さんは背中を向け、歩いていった。

オレは、ゆっくり振り返って吊り橋うんていと向
かい合う。

昨日は一回だけだと思ったから、やれました。

その言葉が出なかった。

でも言えなかった。

足場がスカスカの吊り橋からは、はるか下まで地

面がないことがよくわかる。

昨日の疲労で重くなつた右腕をまわしてみた。登板翌日より状態は悪い。ほんとに四百も投げさすなよ。

これから毎日うんていか。

並のプロをぶつちぎれるレベルになるまでどれくらいかかるかな。一カ月二カ月くらいじゃ全然足りないはずだ。

そんなに長く、命がけの日々かよ。

オレは下を見る。

毎日、命のやりとりをしていけるのだろうか。戦国時代じゃあるまいし。

やめるならいまだ。うん。一度でも吊り橋うんていをクリアできたことは、自信になるはず。そもそもオレがやるのは野球で、野球とはスポーツだ。スポーツで命を落とすこともあるけど、死と直結はしていない。

それに、もしかしてもう精神的にめっちゃくちや

成長してて、フォークもバリバリかもしれない。トライアウトに受かるかどうかじゃなくて、タイトル争いできる選手になっているかもしれないじゃん。

オレは首を振った。

それから叫んだ。

声が谷に反響する。

言い訳ばっかだなオレは。言い訳バカだ。

一回成功したくらいで人間が変わるもんか。本郷さんは、そういうことを言ってるんだ。

人はすぐ変わる。

よく聞く。変わろうと思った時点でもう、変わってるんだ、とか。

でも、もし人が一瞬で変われるとするなら、一瞬で元にもどることだって充分あるはず。というより、ほとんどそうだ。

ある一瞬だけ天才になれても、残りの人生は全部凡才。そんな人ばっかりのはずだ。

オレは橋を見た。

昨日とちがう自分になれたら、それを固定しなければならぬ。そのためのうんていだ。そのための、毎日うんていなんだ。

ところで、橋の上を行けば安全かも。

はいつくばって進めば落ちはしないだろ。ちょっとひざが痛いとか、そんなもんだ。死にはしない。

それから山道を走ってもどつてくれればトレーニングにはなる。

オレはまた首を振った。

この、変なことを考えるのは誰だ。オレの中に別の誰かがいるみたいだった。

筋肉を鍛えるだけなら、帰ってジムに通うほうが効率的だ。お前は帰れ。

オレは、段差に飛び降りた。

昨日やれたことだ。今日もやれる。明日もやれる。細心の注意を払えば、何度でもやれる。

ここでしか得られないものを持って帰るんだ。

オレは棒に手をかけた。

「遅くなりました」

宿舎の前で本郷さんが立ってた。

昨日よりも時間かかったよ。うんていはともかく、山道がね。早い段階で足が痛くなっちゃったからさ。

「ちょっと来い」

本郷さんについてこい、っていう感じで腕をまわす中に入ってく。

なに言われるんだろ。

中に入り、本郷さんが出したカレーライスを食べながら、部屋に引っこんだ本郷さんを待つ。カレーうまうま。死ぬまでこれからずっと、なにかひとつの料理しか食べちゃダメ、って言われたら、カレーを選べばいい。だって肉も野菜もちゃんととれるし、というかうまうま。カレーうまうま。

台所とテーブルを何度も往復してたら本郷さんがもどってきた。手には、家庭用ビデオカメラが。最

近のカメラは小さいのに画質は良いよなあ。オレよ
りずっと前からがんばってる人はたくさんいるんだ。
本郷さんはカメラをテーブルに置き、側面にあつ
たディスプレイを回転させ、画面をオレに向けた。

「見ろ」

暗い画面が青くなり、画面隅に再生、と出た。

青い画面が切りかわる。

谷だ。あ。

「ここは」

まちがえるはずもない。吊り橋うんていだ。

角度的に、木の上にも仕掛けて撮影してることか
な。

「見てろ」

本郷さんのあとに続いてオレが出てきて、二人は
なにか話す。音は聞こえない。オレが段差に飛び降
りる前に本郷さんが帰ったから、これは今日分だ
ろう。

じれったくなるほど、行くべきか迷う野球選手の

姿があった。いや、自由契約だからもう、無職なの
か？ 運動神経のいい無職？ 単なる無職よりバカ
っぽいのはなぜだろう。元気に走りまわってそう
イメージだからかな。わーいわーい。

だから迷ってやっと決心した無職が、うんてい
につかまり出発した。

「よくわたったな」

実物の本郷さんがオレを見る。

「はい」

「これを見て決めた。俺は、今日コーチを辞退し
た」

「は？」

「選手集めに専念することにした」

意味がわからない。

「なんでコーチやめるんすか」

「なんでもなにもあるか。お前の指導もあるし、選
手も集める必要がある」

「選手集めって」

「俺は、球団とある契約をした」

本郷さんはビデオを停止した。「俺は監督としてレッドアローズにもどる」

「監督に」

「そうだ。いまの監督はわかるだろう。特別悪くはないが、万年最下位球団のレッドアローズを押し上げる力はない。そして、球団は選手をそろえる金を出す気はない。逆に流出させて得た金を運営にまわしてやるくらいだ」

「はつきり言いますね」

「ああ。そう球団に言ってやった」

「うわ、えー」

オレは立ちあがった。「そんなこと言って平気なんですか」

オレが言うと、本郷さんはにやりとした。

「そんなに言うなら、お前が監督をやれば勝てるのか、と言われたよ」

「でしようね」

「勝てると言った。そこで決まったんだ。ちょっと待ってろ」

本郷さんは台所へ行くとヤカンのお湯でインスタントコーヒーを入れてもどってきた。

「お前も飲むか」

「いえ」

オレは首を振って牛乳をごくくり。本郷さん、なんかのインタビュで牛乳とミネラルウォーター以外は飲まないって言ってなかった？ 大人なのにコーヒーとかビールとか飲まないんだ！ って衝撃を受けた当時のオレに、そしてその精神を受けついで生きてきた現在のオレに謝ってもらおうか。さあ！

「もちろん、条件がある。あのままの戦力では無理だ。俺の考える要の選手は、バッターなら一番、三番、四番。ピッチャーは、エース、抑えだ。最低限このくらいは、他球団に負けない選手がほしい。もちろん、バッターがもつと集まるならピッチャーは妥協できる。逆も同じだ。このうち、レッドアロー

ズが、他球団と比較しても負けていないのはどれだ？」

「どれだって言われても」

選択肢がないし。

シャイニングス勝利の方程式『三田』の一人、園

田さんは、そもそもレッドアローズの選手だった。

FAでシャイニングスに移籍したのだ。ついでに、

シャイニングス五番の遠藤さんも。二人はそれぞれ、

レッドアローズでは抑えと四番だった。ということ

からも、レッドアローズの選手層は薄いし、重要選

手をあつまりFA流出させちゃうんだねー、つてわ

かる。

レッドアローズは、日によって打順が変わるなん

てあたりまえだ。だから、そもそもこわい一番とか

三番とか四番とか、いない。

こんなダメチームだから、レッドアローズに投げ

てもぼけっとして愛ちゃんが気になっちゃうん

だ。弱すぎるからデッドボール投げちゃったんだぞ、

バカ野郎！ だからそれはちがうんだよな、ほんとういません！

あ、でもたった一人だけいた。

「仙道選手くらいっすかね」

仙道進。

打順は、あえて言うなら三番かな。

現在首位打者を五年連続で獲得している怪物バッ

ターだ。足は速いし長打単打を広角に打ち分けチャ

ンスにも強い。あの人だけはレッドアローズも流出

阻止のため、年々ちゃんと年俸を上げていられるらしい。

でも、シャイニングスに行けば確実に倍以上もらえる、

つてみんな言ってるよ。

あれだけひよいひよい流動的な打順で結果を出し

続けられるんだから、すごいね。ほんとに。レッド

アローズ愛があるらしいけど、移籍したほうがいい

んじゃないかな。

「そう、仙道くらいだ」

本郷さんはうなずく。「だから俺は球団に、新た

に最低限必要な選手を集めてもらえるならば優勝争いに持っていきけると話した」

「でも」

「オーナーもお前と同じ顔だったよ」

本郷さんが笑う。「金がないってな。だから言った。スカウトは使わなくても必要な選手は俺が自分で連れてくるし、合計年俸は一億円以内におさめる。これだったらどうだってな」

「一億っすか」

「たったの。」

「それだってレッドアローズには大金だが、一億を俺の権限けんげんで自由に補強ほきょう費用として使わせてくれたら、仮に、Aクラスに残れなかった年は、俺の給料全カットでいいとも言った。そしたらしぶしぶOKしたよ」

本郷さんは言うけれども。

一億って、全然足りないだろう。

もうすでに強いシャイニングスの補強費が一億で

もどうしたの？ ってくらい安いのに、レッドアローズの補強が一億って、おいおい（苦笑）だよ。

で、それだけ安くすまそうとしたら、新人か、他球団なら現在ほたいした結果を出せていない選手しかとれない。だいいち、一人二千万円としても、五人しか集まらない。

中ちゆうと途半端はんぱなのを五人か、いけそうなのを一人か二人。

それが一億。

足りない。

「しかも本郷さんの負担が重すぎっす」

「それはお前が気にすることじゃない」

本郷さんは首を振った。「お前には、年俸一千万で、絶対的な抑えになってもらう。それこそ、1点も取られない守護神に」

「俺がっすか」

「そうだ」

「いや、それはきついつすね。年俸は充分っすけど、

だってフォークが投げられなくなって、プロを続けるのにも困ってるんすよ」

「それがどうした」

本郷さんは言った。「また投げられるようになればいいじゃないか」

「え、アテがあるんすか」

マジで？

「ない」

本郷さんは言う。「お前が危険球でフォークを投げられなくなったのはわかっている。それを乗り越えろ。自力じりきでな」

「はあ」

なんだよ。

「ま、お前にはストレートだけでやっていけるくらいになってもらうが」

「ストレートの限界を超えろ」

本郷さんびしっ！

「え？」

オレ疑問形！ 「え、いやいや、プロは、ストリートだけで抑えるのは無理っすよ」

ある場面で力じまんが全球ストリートっていうのはある。でも、変化球を投げないプロ選手なんて見たことも聞いたこともない。それ以上に、守護神といえど一級品の変化球が最低ひとつは必要、というのが定説だ。

つーかいまどき高校生だってすっげースライダーとか持つてるよ。

「俺の見る限り、お前はまだ伸びしろがある。フォークは精神的に投げられないだけなんだろうが、回復をただ待つより、攻めるべきだ」

「攻める？」

「お前はストリートだけでバッターを抑えられる、日本一の抑えになれ」

どーん！

「いやあ」

オレは手を振る。「無理っすよ」

「無理なものか」

本郷さんは笑った。「昨日、今日と吊り橋をわたったな。ふつうの神経じゃ無理だ。帰るって言い出すに決まってる。落ちたら死ぬんだからな。でもお前はやった」

「やりましたけど」

「お前はもう、限界を超えはじめてる」

「オレがつすか」

「そうだ。それに、お前に限界を超えてもらわないと、俺も監督になれない。仕事がないんだよ」

「オレもつす」

オレはうなづく。

本郷さんは笑う。

「やるか？」

「はい！」

オレは立ちあがった。「カレー、おかわり！」

本郷さんは吹きだした。

「鍋にメシ入れて食え！」

いろんな練習をした。まき割りとか、指げんすいとか。鉄球てつきゅう投げなんてのもあった。坂道というか、山道ダッシュとか。猪いのししと競走とか、お料理教室とか、バランスボール上での投げ込みとか。

いつでも晴れではない。

「雨っすね」

「おう。どうする」

「やりますよ」

オレがそう言うとお本郷さんはうれしそうだった。

雨だろうがなんだろうがうんていは毎日やった。

雨で手がすべることはない。手がすべることを許さなかったからだ。

うんていを欠かしてはいけない、という確信があった。うんていは要だ。命がけの練習は欠かしてはならない。常に自分を緊張状態に置く。ずっと張り

つめた中でそうすることで、オレは退さがることなく、前に進めるのだ。

ゆるめてこれ以上なにかを失うのだけはかんべんだった。

どんなにだるくても、うんていはやり続ける。そうして冬になって、春になって夏になって。

気温が上がっても山の暑さはきびしくは感じられず、むしろすこしやすくなっただけだ。

「今日から、これをつけて練習をこなせ」

オレがわたされたのは、おもりだった。足首につけるおもりで、マジックテープで留とめられるリングで、中に鉛なまりが入っていた。片足五キロだ。

「これを増やしていくんすね」

オレが言うと、本郷さんは親指を立てた。

こうして、仲良しになったうんていと、また初対面にもどった。また、死が身近になる。

おもりはさらに重くなり、オレの頭は、バリカンですっかり軽くなった。

秋になり、冬になり、春になり。

どんどん季節は進み、いまがいつなのか全然気にならなくなったある日、久しぶりに他人と会った。

「二階堂だ」

本郷さんが紹しょうかい介してくれた。